

## 会員新刊紹介

### 山下宏明著

#### 『『平家物語』入門』

#### 琵琶法師の「平家」を読む』

『平家物語』は、現代人の読者に何を伝えようとしているのか。私たち読者は、その訴えかける何かをどのように読み取り、理解したらいいのだろうか。

そういった問いかけに答えようとしたのが本書である。著者の目的は「琵琶法師の語る源平争乱の歴史を物語として読む」ことにある。自分の読み方を示し、改めて『平家物語』という物語を原文で読むよう促すことで、読者に自分なりの解釈を見つけてもらいたい、というのである。つまり、単なる注釈書ではなく、新たな読みを導くための入門書なのである。

原典である『平家物語』という作品には、内容や表現が異なる多様なテクストが存在する。現在伝えられている諸本は通常、琵琶法師の語る〈語り本〉と、語り本との交流をもとに諸テクストを寺社で書写し、取り合わせながら読み物として編集された〈読み本〉の二つの系列

に大別される。八十数種に上るテクストのうち本書で取り扱うのは、琵琶法師の組織である当道座の総検校となつた明石校検一が、座の正本(証本・規範となるテクスト)として定めた覚一本である。岩波書店から刊行されている『新日本古典文学大系』『岩波文庫』を底本に使用し、適宜〈読み本〉にも触れながら、『保元物語』から『平治物語』を経て『平家物語』へと至る物語の「連鎖」を読み解いていく。

これまでの入門書と違って特徴的なのは、適宜平曲における琵琶の奏法について触れている点である。具体的に言えば、英雄の登場場面や戦闘描写など合戦ものによく用される勇壮・活発な「拾ひろい」や物語の昂揚場面で扱われる「中音ちゆうおん」、最高音域で今様のような韻律的表現、物語世界を最高潮に導く場面で使用される「三重さんじゆう」などである。最も多くの奏法が見られる「木曾最期」の場面では、主従二騎となった木曾義仲と乳母子・今井兼平の姿を以下のように記している。

平家琵琶として今井の動きを勇壮な「拾」から「強声」、さらに現存の「平家」では三か所にしか見えない「走り三重」まで駆逐して語り抜き、義仲については感傷的な「中音」「初重」「口説」で謡い語る。

このような奏法の説明は、琵琶法師が何を訴えたかった

のか、物語に込められた思いを理解するよき助けとなっている。

著者は、この琵琶法師の語るいくさ物語を「勝者、源氏を描く源氏の物語ではなく、敗者、平家を描く平家の物語」として読む。そして「事件を記憶する盲目の琵琶法師が動乱の世をどのように感じ、考え、どのように語ったかを読み解いてゆく」ことよって「中世の人々の歴史の読みを物語として読む」。それは読者と語り手との対話であり、当時の歴史認識を知ることでもある。

滅びゆく人々の心の動き、世の人々の平穏な生活を願う切なる想いも取り込みながら、哀感を込めて物語を語る琵琶法師の〈声〉は、歴史の一つの区切りとして平家の嫡孫・六代の死を以て平家の断絶を記し、一旦は物語を締めくくる。だが平家への思いは、別巻「灌頂卷」として都を離れ西海に命を散らしていった人々の鎮魂のために余生を送る、建礼門院の物語へとつながる。

寛一はなぜ女院の後日譚を特記したのか。その答えは女院の「六道之沙汰」、六道体験の語りにある。「盛んなる者」清盛の下で、冒頭「祇園精舎」で語われた盛者必衰の摂理を「まぢかく」体験した女院は、「父祖の罪業は子孫にむくふ」ものであることを自ら身をもって思い知る。法皇との対話により、物語の主題が引き出される

のである。

本書を通して、一人でも多くの読者に『平家物語』という作品を手に取り、その重厚な世界に触れる機会をもっていたいただきたい一冊である。

〈二〇二二年一月二〇日刊、笠間書院、B六版三三八頁、

一、九〇〇円＋税〉

(横山知恵・名古屋大学大学院博士課程後期課程)